

I はじめに

上級コースに対する学生の評価をまとめるのが本稿の目的であるが、そのためには上級コースの全体像が明らかにされていなければならない。上級コースは、初級コースと違って、教材、授業方法が担当教師に一任され、これまで学習内容の明確なシラバスがなかったとも言える。しかし、現在、初級から上級までを通した一貫したシラバスが必要とされ、再考の時期にきていると考えられる。そこで、次章においてこれまでの上級コースの概要を記し、Ⅲ章で、学生の評価について述べ、筆者の私見も入るが、上級コースについて検討する。

Ⅱ 上級コースの概要

1 資料

概要についての資料は、1988年春学期から1991年冬学期、学生の評価についての資料は、1990年冬学期から1991年冬学期を対象とする。

A 概要についての資料：

- a) 『国際基督教大学 教養学部要覧 1992-93』
- b) INTERNATIONAL CHRISTIAN UNIVERSITY Bulletin of the College of Liberal Arts 1992-93 (上記aの英語版)
- c) 『履修の手引と COURSE OFFERINGS AND GUIDE TO ACADEMIC REGULATIONS』(1988～1991年度版)
- d) 上級日本語コースの概要及びコース・スケジュール(1988年春学期～1991年冬学期)各担当教師が作成したもの
- e) 上級日本語コース・アンケート調査(1989年秋学期、1991年春学期及び秋学期)(田中)

B 学生の評価についての資料

- a) ICU日本語教育プログラム(以下JLPと略)コース評価(COURSE EVALUATION)(1991 春学期, 1991 秋学期, 1991 冬学期)
- b) JLP staff meeting (1991 4 5) 議事録(Adv. TR. Adv. AC. に関して)
- c) JLP staff meeting (1991 4 5) 報告資料「FD-Advanced Japanese Writing & Theme Writing I, II に関して」(稲垣)
- d) JLP staff meeting (1991 12 17) 報告資料「Adv. I に関して」(田中)
- e) 「1991年春 Text Reading コメント」(1991 6)(田中)

2 定義

上級日本語(ADVANCED JAPANESE)は、上級日本語Ⅰとそれに続く上級Ⅱがあり、それぞれ講義講読(Text Reading 以下TRと略)、作文及び論文(Writing &

Theme Writing 以下WRと略)、講義理解 (Aural Comprehension 以下ACと略) の三つの独立したスキル別コースから成っている。資料A-aによると、日本語集中教育Ⅲ (INTENSIVE JAPANESE Ⅲ)、日本語Ⅵ (JAPANESE Ⅵ) に続く科目で、それぞれ、講読 (各種作品の精読・速読)、作文 (各種テーマ)、聴解 (録音、録画された講義などの教材) とある。英文での説明 (資料A-b) は巻末を参照されたい。また、上級Ⅰは各コース週3時間2単位、上級Ⅱは同2時間1単位である。

3 開講学期

開講学期は、1992年春学期までは以下のとおりである。

	秋学期	冬学期	春学期
上級Ⅰ	○		○
上級Ⅱ		○	

表を見てもわかるように、これまでは上級Ⅰと上級Ⅱが同時に開講されることがなかった。特に上級Ⅱについては、冬学期に履修できなかった場合には、本科生は1年間待たねばならず、1年間の留学生は履修をあきらめねばならないのが現状であった。しかし、1992年秋学期からは以下のように開講学期が改められる。

	秋学期	冬学期	春学期
上級Ⅰ	○	○	○
上級Ⅱ		○	○

4 時間帯

上級日本語は例年履修学生の登録人数が20名以上になるため、2セッション (A, B) が設けられていた。そして、原則として、学生が自分の履修科目の時間帯によってAまたはBのセッションを選択していた。ただし、本科生は3コースとも履修しなければならないので、A、Bどちらのセッションを選択してもコースの組み合わせが変わるだけである。しかし、その他の学生 (1年間の交換留学生や研究生、大学院生) は、自分の必要とするスキルや専門科目との関係でセッションを選択していた。

開講時間は、1991年冬学期までは、概ね以下のような時間帯である。

[上級Ⅰの例]

曜日		月		水		金	
時間	セッション	A	B	A	B	A	B
Ⅲ		TR	AC	TR	AC	TR	AC
Ⅳ		AC	WR	AC	WR	AC	WR
Ⅴ		WR	TR	WR	TR	WR	TR

しかし、1992年秋学期より登録人数の多いときにのみ2セッションが設けられることになった。

5 教材

以下に1988年春学期より1991年冬学期までに使用された教材を記す。(資料A-dより)

	TR	WR	AC
1988年春学期 (上級 I)	日本語の性格を知ることは(金田一春彦) 日本人の心づかい(金田一春彦) 二つの挿話(池上嘉彦) 言語ともの(池上嘉彦) 言語と文化・思想(池上嘉彦) 新聞記事 『ポッコちゃん』(星新一)	『日本語の書きかたハンドブック』 (稲垣滋子)	ビデオ「秋葉原」 ビデオ「日本語の特質」 ビデオ「すねかじりの家計簿」 ニュース・報道番組
1988年秋学期 (上級 I)	新聞記事 『ポッコちゃん』(星新一) プリント	『日本語の書きかたハンドブック』	ビデオ「秋葉原」 ビデオ「日本語の特質」 ビデオ「すねかじりの家計簿」 ビデオ「歌舞伎座界限」 スライド「日本の行事」
1988年冬学期 (上級 II)	日本企業で働く外国人(ICU ALUMNI) 新聞記事(外国人労働者) (天皇「昭和を送る」)(世界の結婚) (留学生住宅事情)	法律相談 コラム プロジェクト 論文指導	ビデオ「徹子の部屋」 ビデオ「名刺交換列車の乗客たち」 ビデオ「外国人留学生」「外国人労働者」 「ストレス」 ドラマ
1989年春学期 (上級 I)	新聞記事 『ポッコちゃん』(星新一) 専門書からのコピー	新聞作り プリント『外国人のための 日本語 例文・問題シリーズ』	ビデオ「東京変わりゆく都市」 テープ「ニュースで学ぶ日本語」 テープ「暮らしの中の日本語」
1989年秋学期 (上級 I)	新聞記事 『螢』(村上春樹)	『実践にほんごの作文』 プリント『外国人のための 日本語 例文・問題シリーズ』	テープ「『朝日新聞の声』を聴く」 ビデオ「神保町 古本屋街」 ニュース
1989年冬学期 (上級 II)	新聞記事 『適応の条件』(中根千枝)	『実践にほんごの作文』 プリント『外国人のための 日本語 例文・問題シリーズ』	ビデオ「ニュース・ショー ゴマの効能」 テープ「講義を聞く技術」 ビデオ ミニ講義(ICU 星野命教授) スライド「お正月」
1990年春学期 (上級 I)	新聞記事	『実践にほんごの作文』 プリント『外国人のための 日本語 例文・問題シリーズ』	テープ「『朝日新聞の声』を聴く」 ニュース ビデオ「東京探検」 ビデオ「オノ・ヨーコ・インタビュー」
1990年秋学期	『日本外交 反省と転換』(浅井基文)	『日本語の書きかたハンドブック』	ビデオ「オノ・ヨーコ・インタビュー」

(上級 I)	『蜚』(村上春樹)	『よくわかる常用漢字』	ビデオ「神保町 古本屋街」 ビデオ「迷学の旅 富士山と銭湯」 ビデオ「吉祥寺物語」 ビデオ「黒澤明・大林宣彦 映画的对話」 ニュース ビデオ「東京探検」
1990年冬学期 (上級 II)	『豊かさとは何か』(嵯峨淑子) 新聞記事	『日本語の書きかたハンドブック』 『よくわかる常用漢字』	ビデオ「世界の中の日本語」 ビデオ「日本人と日本語」 ビデオ「東京変わりゆく都市」 ニュース
1991年春学期 (上級 I)	『英語教育』(小論文、随筆) 新聞記事 『無名仮名人名簿』(向田邦子)	『日本語の書きかたハンドブック』 『よくわかる常用漢字』	ビデオ「ニュース・ショー コマの効能」 ビデオ「世にも奇妙な物語」 ビデオ「百年目の電話」 ビデオ「家庭の問題」 ビデオ「新宿駅長」 テープ「ニュースで学ぶ日本語」 テープ「講義を聞く技術」 ニュース
1991年秋学期 (上級 I)	『読解演習 はじめての専門書』 新聞記事 『無名仮名人名簿』(向田邦子)	『実践にほんごの作文』 プリント 要約練習	テープ「ニュースで学ぶ日本語」 ニュース ビデオ「神保町 古本屋街」 ニュース ビデオ「東京探検」 テープ「講義を聞く技術」
1991年冬学期 (上級 II)	『読解演習 はじめての専門書』 『日本語テスト問題集』 学生が個々に選んだ本	『実践にほんごの作文』 プリント 手紙練習	ビデオ「世界の中の日本語」 ビデオ「山田洋次の世界」 ビデオ「現代ジャーナル 日本語」 ビデオ「東京変わりゆく都市」 (ビデオはほとんどがテレビを録画したもの)

6 学生の関心のある分野

上級コースは日本語プログラムの最終段階であり、コース終了後外国人学生は日本人学生と同じ授業を受けることになる。したがって、上級コースの目標は、日本語の講義が聴き取れ、テキストが読め、レポートさらには論文が書けることである。5にあげた教材は、最終目標を目指して選ばれたものであり、その点では学習者のニーズにはかなったものであるはずであるが、彼らの関心と必ずしも一致しているとは限らない。そこで、以下に学生が関心をもっているとした分野を記す。資料(資料A-e)は筆者が学期の最初のクラスで行ったアンケートからとったものである。

(51名 複数回答)

社会問題	33
文化	32
芸術（音楽、美術、演劇、映画等）	30
国際問題	29
文学（小説、詩等）	25
経済	23
政治	18
教育	13
科学（情報科学、コンピューター等）	11
家庭欄（料理、ファッション、インテリア、掃除等）	10
スポーツ	9
宗教	5
公衆衛生・環境問題	4
社会学	5
心理学	4
生物学	3
文化人類学	3
数学	2
その他（日本近代史 1, 福祉制度 1）	

Ⅲ 学生の評価

以下、「コース評価」の質問に沿って、学生の上級コースに対する評価及びコースの抱える問題点について述べる。

（以下の（Ⅰ）は「コース評価」の質問Ⅰに対応する）

（Ⅰ） 予習と復習にかかる時間：

これは個人によって違い、30分～4時間、レポート等が課された場合には1日中とある。

（Ⅱ） クラス外で日本語を使うか：

この質問に対しては、上級コースなので、ほぼ全員がよく使うと答えている。

（Ⅲ） コース全体についてのコメント：

（Ⅰ）単位数と学習内容：

前述したように上級Ⅰは週3時間で2単位、上級Ⅱは週2時間で1単位である。上級Ⅰに対しても、授業の準備に必要な学習時間及び学習労力に見合った単位ではないというコメントが非常に多いが、上級Ⅱでは上級Ⅰより時間数あたりの単位数がさらに減るのはおかしいというコメントが毎学期出る。コース全体を通して、教師の課す宿題等が多すぎるというのも、単位数に見合っていないということであろう。時間数を減らせというコメントはなく、逆に上級Ⅱも上級Ⅰと同じ時間数開講

してほしいという希望もある。コースが全体的に全く役に立たないというコメントはなく、むしろ非常に役に立っているというコメントのほうが多い。ある学生は、勉強するのが決していやなのではないが、一生懸命努力しても単位は少ないし、Aをとるのも難しく、欲求不満に陥ると言っている。参考までに記すと、INTENSIVE コースは週22時間で9単位、JAPANESE コースは週10時間で6単位である。これらを基準にすれば少ないわけではないが、初級や中級コースとは学習内容が違い、1時間ののクラスに参加するための予習の時間も、また課されたレポートや論文を書くのに費やす時間や労力もそれまでとは比較にならないと言えるだろう。1時間の内容を考慮すればもっと多くの単位が与えられてよいし、上級Ⅱに関しては上級Ⅰ以上の単位数（少なくとも同じ単位数）が与えて当然であり、減ることはあってはならないと思う。

さらに、中級までは、日本語プログラムの授業に多くの時間や労力をかけていた、あるいはかけざるをえなかったが、上級になると、専門の授業も並行して取り始める。日本語プロパーから日本語は手段となり、専門科目により力を注ぎたいと思うようになる。その反面、日本語で行われる講義をまだ完全に理解できず、日本語学習の必要性も感じている。そういった学習者の心理面も考慮して、日本語学習の負担を軽くするか、単位数を大幅に増やして学習のモチベーションを高める必要があると考えられる。

(2) コーディネーション

コース全体を通して、disorganized というコメントがある。スケジュールの変更が多すぎる、途中で試験からレポートに変更した等の指摘がある。三つのコースのスケジュールがばらばらであるうえに、各コースでスケジュールの変更が行われるのであるから、学生も混乱するのであろう。ただし、課題やクイズの軽減に関しては flexible として歓迎されている。3コース全体をいっしょにしたスケジュールがほしいという希望もある。現在3コースが3人のコース責任者によって別個に運営されており、教師間で緻密な連絡がとられるのが理想だと分かっているが、教師の多忙やかかわる教師の多さから、現状ではそうっていないと認めざるをえない。また、3コースすべてをとる学生とそうではない学生がいることも問題の解決を難しくしている。3コースをまとめよという意見がある一方で、中級のコースも上級コースのようにスキル別にしたほうがよいという声もある。

次に、スキル別 (TR, WR, AC) のコース評価について記す。以下、各コースに対する評価は、全体的には悪くなく、なかには「とてもよい」というものもあるが、ここでは、問題点を中心に取り上げる。

(IV) TRについて

上級の読解教材は大きく三つに分けられるだろう。第一はジャンル別教材（いろいろ考えられるが、実際に取り上げられているのは、主に短編小説）、第二は、新聞記事等の時事的なもの（コピー教材）、第三は専門書につながるテキストの一部

(コピー教材あるいは『はじめての専門書』等の市販教材)である。

教材の形態としては、短編小説は通常市販の文庫本が使われ、専門書につながるものとして新書版も何度か使われている。

テキストの内容に関しては、学生によって関心が異なる。たとえば、村上春樹の小説『螢』は、「中級までの既製のテキストには出て来なかった表現や知識が覚えられる、日本人と共通の話題ができる、文学が味わえる等」と評価された一方で、小説は自分で読むものでクラスで取り上げるものではないというコメントがあった。また、向田邦子の短編はスタイルが同じなので2、3回で十分だというコメントもあった。『日本外交 反省と転換』には歴史のクラスのような意見があった。『適応の条件』は欧米系の学生によりもアジア系の学生に歓迎された。また、全体的に文化の比較が多すぎるという意見もあった。

新聞記事などの教材は、いろいろなトピックが選べ、時事的な事柄なので学生の関心も高い。ただし、この種の教材はストックすることができず、毎回入れ換えなければならない。

専門書につながる『読解演習 はじめての専門書』(山本一枝他)は、いろいろな分野のテキストの一部を集めたもので、文型や表現の練習問題もついている。評判はよかったが、既製のテキストに頼るのではなく、将来的にはICUの専門コースに役立つようなテキストの開発が必要であろう。

授業の進め方としては、学期によっては、教師はことばの意味の説明に時間を使うのではなく、内容に重点を置いてほしい、もっと速く読み進めてほしいというコメントがあった。

また、授業形態として発表方式がとられた学期があったが、自分の担当した分については非常に勉強になったが、他の人の発表のときには勉強しなかった、したがって他の人の発表からどのくらい学んだか疑問だという意見もあった。さらには、単に読むだけでなく、討論の機会を多く持てたのは非常によかったという意見もあった。

クイズに関しては、暗記に頼るものに対する批判があった。

(V) WRについて

テキストとしては、主として『日本語の書きかたハンドブック』(稲垣滋子)と『実践 にほんごの作文』(佐藤政光他)が使われている。どちらのテキストもレポートや論文を書くのに役立ったと評価されている。アンケート調査、レポート、特に最後の小論文作成に関しては、大変な労力、時間を費やさなければならないわけだが、必要性があり完成作品が残ることもあって満足度は高い。学期によっては小論文集が作成されている。また、論文指導においては、個人指導形態がとられることが多かったようだが、これも歓迎されている。

学期によっては、作文の数が不足というコメントもある。1991年秋学期は毎週1時間を要約練習に、また同冬学期は手紙の練習に徹底して当てられたが、特に手紙の練習等は評判がよかった。

さらにWRにおいては、漢字に関する学習も行われ、1990年秋学期～1991年春学

期には『よくわかる常用漢字』をテキストに毎週1回漢字中心の授業が行われた。コメントとしては、漢字を五十音順に勉強することに対する疑問、文字と単語の単位で習ったので実際の使用法がよく分からなかったということがあげられている。また、学習漢字を使って作文をすることにもコメントがあがっているが、漢字学習の時間が設けられたことに感謝する声もある。

さらには、文型練習は上級に至っても評価が高く、それに重きを置かなかった学期には文型練習の必要性がコメントとしてあがっている。

まとめると、上級ⅠのWRでは、週3時間のうち、2時間が作文に当てられ、残りの1時間が、学期によって、つまり担当教師によって、文法や表現（文型練習）に使われたり、漢字学習に使われたり、要約文の徹底練習に使われたりしているようである。その結果、その学期に重点の置かれなかった点にコメントが出ている。結論としては、上級Ⅰ、上級Ⅱを通した上級全体の時間不足と言えるかもしれない。現に上級Ⅱに対しては、Ⅰと同様に週3時間必要だという声もあがっている。

(Ⅵ) ACについて

内容に関しては、学期によっても、また同じ学期でも個人によって評価が違う。全体的に非常によかったという学期もあるが、経済関係、国際問題をもっと取り上げてほしかった、ドラマなど学術的でないことも取り上げてほしかったという学期もある。また、難易度に関しては、非常に難しかったがチャレンジングでよかった、特に up-to-date なニュースがよかったという声がある反面、いろいろなニュースがいっしょになってよく分からなかったという声もある。つまり、ビデオやテープの内容に対する感想や難易度は非常に個人差が大きいと言える。

ビデオやテープの学習方法として、教師がコントロールするのではなく、録音したあと自分で納得のいくまで聞かせてほしいという声があがっている。そして、そのあと要旨を書いて提出し、スクリプトをもらおうという方法がよいのではないかと提案されている。

予習シートや単語リストは重宝だとされている。

語彙クイズに関しては、あまり一般的でない語彙は覚える必要はないのではないかというコメントがある。

また、学期によっては話し方のクラスが評価されているが、ビデオだけでなく、suprasegmentals (tone, stress, pitch 等) 音声面での指導もしてほしいという希望の出ている学期もある。

上級では3コース共通して課題が多すぎるという声があがっているが、ACに関して特にその傾向が強いようである。しかし、一方では、ACの時間数、つまり聞いたり話したりする時間をもっと増やしてほしいという声もあがっており、学生の評価全体からも、「聞く・話す力」が読んだり書いたりする力よりも個人差の大きいことが窺える。ACにおいては、TRやWRよりもさらに細かな対応が必要とされているようで、セクションを能力別にすることも考えられる。教師側の対応は複雑になるが、セクション別に教材の内容や扱い方を検討する必要があると言えよう。

(Ⅶ) 時間割(時間帯)について:

前述したように上級Ⅰは月水金のⅢ～Ⅴ時限に行われている。月水金のⅢ、Ⅳ時限には基礎科目の開講が多いので(ゴールデンアワーと言われている)、日本語教育のプログラムは火木を中心にすればよいという意見がある。(注1) また、Ⅴ～Ⅶ時限は専門科目が開講されるので、Ⅱ～Ⅳ時限にしてはどうかという意見もかなりあった。特に後者の、専門科目がとれないという不満が多かった。JLPとしては、午前中に授業が集中すると、その時間帯に必要な教師の数が増え、またラボの使用時間帯も他の授業と重なってくることが考えられる。

(Ⅷ) 教師について:

教師についてのコメントは省略するが、概ねよいとされている。

Ⅳ おわりに

以上、Ⅱにおいて上級コースの概要を、Ⅲにおいて学生の評価を記した。Ⅲには筆者の私見も入っているが、これまでJLPスタッフ・ミーティングにおいて話し合われたことも含めたつもりである。

上級コースの問題として学生が最も不満に思っていることは、学習内容、学習に注ぐ労力、時間に見合った単位が与えられていないことである。語学学習から一般の講義へと移行する、この段階での学習者のモチベーションを高めるためには、授業内容の充実を図るとともに、学習者の心理面にもさらに気を配らなければならないと思う。

もう一点は、スキル別の3コースのコーディネーションの問題である。これは上級コースのみの問題ではなく、ICUの日本語教育プログラムのカリキュラム及び初級から中級を経て上級につながるシラバスとも関連してくる。この点に関しては、現在JLPにおいて検討中であるが、日本語教育プログラムと一般教養科目の間に位置する(科目としては日本語教育プログラムに含まれるわけだが)上級コースについても、より一層の検討がなされることを期待したい。

(注1) 1986年秋学期～1989年冬学期に、日本語Ⅳ～Ⅵのコースの一部が、月～金の毎日2時間の時間割から火・木のみ(1日5時間)の時間割に移されたが、学生側からも教師側からも好ましくないということで、結局もとに近い現在の時間割に戻された。

[本文引用テキスト]

浅井基文『日本外交 反省と転換』(岩波新書)

稲垣滋子(1986)『日本語の書きかたハンドブック』くろしお出版

佐藤政光他(1986)『実践 にほんごの作文』凡人社

中根千枝『適応の条件』(講談社現代新書)

向田邦子『無名仮名人名簿』(文春文庫)

村上春樹『螢』（新潮文庫）

山本一枝他（1987）『読解演習 はじめての専門書』凡人社

[資料A - b]

LIj 015-025JE ADVANCED JAPANESE (TEXT
READING) I-II, 2-1 units

LIj 016-026JE ADVANCED JAPANESE
(WRITING & THEME WRITING) I-II, 2-1 units

LIj 017-027JE ADVANCED JAPANESE (AURAL
COMPREHENSION) I-II, 2-1 units

These courses are designed to prepare non-Japanese students for effective participation in university classes taught through the medium of Japanese. Prerequisite: INTENSIVE JAPANESE III, JAPANESE VI, or the equivalent.

TEXT READING I-II

This course is designed to improve reading ability. Both speed and accuracy are emphasized. The course also aims at developing ability for self-study with the use of dictionaries. Materials are selected from popular publications in various fields, and students are expected to participate in discussions in Japanese.

WRITING & THEME WRITING I-II

This course begins with sentence structure and progresses through the development of paragraphs and various writing styles such as short essays, resumes, and theme writing.

AURAL COMPREHENSION I-II

In this course TV programs and other audio-visual aids are used to increase listening and speaking ability and to provide practice in taking notes and summarizing in Japanese.